

「日本語スキルA」 1年目・2年目の実践報告

ー日本語運用力の向上をめざしてー

寺井 一 ・ 生田 裕子

1 はじめに

新教育改革により平成23年度にスキル科目「日本語スキルA」が新設された。この科目は、大学生に必要な日本語の運用能力の基礎を学ぶ科目として全学的な要請の下で設置され、大学1年生向けに開講されるものである。現在は春学期に工・経営情報・応用生物学部、秋学期に国際関係・人文・生命健康・現代教育学部に開講され、春学期の全学部、国際関係学部国際関係学科・国際文化学科、人文学部コミュニケーション学科の学生には必修科目となっている。必修科目となっていない学生にも履修の機会は保障されており、年間の履修学生数は約2,200名。1クラス約40名規模での開講であり、開講数は約50クラスである。「日本語スキルA」は現代教育学部共通教育科が担当し、専任教員2名、兼任教員7名、非常勤講師6名で授業を運営している。

この科目が扱う内容については、設置の前年度にワーキンググループ（以下WGとする）¹⁾によって討議が重ねられた。各学部へのヒアリングも踏まえた結果、学部学科によらず、全ての大学生が大学生活に必要な日本語スキルの修得を目指すこととした。

「日本語スキルA」の「カリキュラムにおける科目の位置づけ」は以下のようなものである。

全学共通教育科目の「スキル科目」に属する科目である。中部大学の基本理念・教育目的にもとづく大学教育を受けるために、学部学科に共通して必要となる学びのスキルの習得を目的とする。この科目では特に、学部や専門分野にかかわらず、日本語に関する基礎的な知識・素養を身に付け、大学生の基礎スキルとしての日本語運用能力の向上を目指す。すべての学部学科の教育目的につながる基礎的な科目の一つである。

これに基づき、全てのクラスにおいてほぼ同じ内容と進度で展開することを確認した。

また、「日本語検定」（特定非営利活動法人日本語検定委員会主催）の受検を推奨し、日本語検定3級に合格できる力を付けるという具体的な目標を掲げることとした。

本稿は、このような経緯で立ち上げられた「日本語スキルA」の1年目と2年目の実践について報告するものである。なお、「日本語スキルB」は2011年度以降入学の2年生以上を対象に平成24年度から開講され、「日本語スキルA」より高度な内容を扱うものであるため、本稿では言及しない。

2 「日本語スキルA」の授業

2.1 3つの柱とそれぞれの目標

「日本語スキルA」は、①日本語の基礎知識、②書くこと、③話すこと、以上3つを柱とし、その基本を身に付けさせることを目的としている。半期2単位の授業としては欲張った目的であると考えられるかもしれないが、WGにおいては「広く、浅く」学ぶことが出発点におけるコンセンサスであった。半期の授業だけでは十分な日本語の運用能力が身に付かないことは自明のことであり、学生にそれを身に付けさせるには、大学4年間にわたって、学生に関わるあらゆる教員がそれぞれの立場で努力を行わなくてはならない。その土台作りを「日本語スキルA」で行うということになる。

これについては、1年目春学期後、授業担当教員から、内容を盛り込み過ぎではないかとの意見が出された。しかし、学生からは3つの柱のどれも重要なものだという声が多く、それぞれへの学習の要望があることも分かったため、3つの柱の指導を堅持することとした。

上記の①～③については、具体的目標を以下のように設定した。

①「日本語の基礎知識」

敬語や文法の語学的な基礎を理解し、日本語を誤りなく使用できること

②「書くこと」

わかりやすい文章を書く際の注意点を理解し、最終的に約800字の小論文を書くこと

③「話すこと」

わかりやすい話し方を工夫し、人前に出てスピーチの経験をする

2.2 日本語検定との関連

日本語検定は「敬語」「文法」「語彙」「言葉の意味」「表記」「漢字」の6領域から出題される。しかし、3つの柱を定めた「日本語スキルA」の授業の中でその全てを扱うのは難しい。そこで、「敬語」「文法」の2領域のみを授業で扱うことにした。この2つの領域は言語学的な理論が込み入った領域であり、学生の自学自習が難しい。よって、授業で解説と練習を行うのが効果的だと判断したからである。また、日本語検定の有無に拘らず、この2領域は社会人として生活する上で必要とされることは明らかであり、学生の要求度も高いものであろうと考えた。

また、残りの4領域については、「語彙」「漢字」など記憶に頼る要素の強い領域であるため、毎時間小テストを行って知識の定着を図ることとした。学生は小テスト用のテキストを購入し、毎回指定された小テストの範囲を自学自習する。具体的な学習計画については2.4で述べる。

2.3 教科書の作成

「日本語スキルA」で学ぶ内容を全クラスである程度統一するためには、それを具体的に示したテキストが必要である。1年目には、WGがオリジナルで作成したものを印刷し、冊子の形にして学生に配布した。2年目は、1年目の経験を踏まえてそれを改訂し、『日本語スキル』（中部大学日本語スキル研究会著、学術図書刊）として出版し、教科書とした。各章が1回分の授業の内容に相当するように編集し、巻末には日本語検定3級の問題（1回分）と提出用の原稿用紙・

課題シートなどを付けた。この教科書は、小テスト用のテキスト『社会人のための日本語トレーニング』（日本語検定委員会監修、エデュケーションネットワーク刊）とともに全クラスで共通使用している。

2.4 授業計画と主な内容

表1に平成24年度の授業計画・小テスト実施範囲を掲げる。学期の前半で「日本語の基礎知識（検定対策）」、後半で「書くこと」「話すこと」を扱う。

授業の進め方は、前半の授業（敬語・文法）に関しては、テキストに沿って説明し練習問題をその場で言い解答解説をしていく方法が基本である。

後半の「書くこと」「話すこと」は、図1（次ページ）のように同一のテーマで連動させて、それぞれのスキルアップを図っているのが特徴である。

この方法で、1年目も2年目も、受講したほとんどの学生が800字程度の小論文を自力で書き、一度は人前に出てきちんと自分の考えを話す経験を積むことができた。

2.5 小テスト

日本語検定は年2回、6月中旬と11月中旬頃に実施される。授業で扱わない4領域については、検定までに網羅できるように小テストの計画を立てた。

小テストは、授業の初めの約5分間で行っている。こうすることで、学生に時間通り授業に来ることを促す効果も狙っている。特に1・2時限目開講の場合、遅刻をすると小テストが受けられず必然的に成績に影響することになるため、学生には注意を促している。

表1 授業計画

	内容	項 目	小テスト範囲
01	検 定 対 策	オリエンテーション・日本語検定過去問	
02		教科書『日本語スキル』 敬語1（尊敬語）	『社会人のための日本語トレーニング』 語彙・言葉の意味①
03		敬語2（謙譲語）	語彙・言葉の意味②
04		敬語3（注意すべき敬語）	語彙・言葉の意味③
05		文法1（品詞分類・動詞の種類と活用）	語彙・言葉の意味④
06		文法2（ら抜き・れ足す・さ入れ言葉）	漢字・表記①
07	話 す ・ 書 く 技 術	復習テスト 文章表現の概論	
08		文章作成1	漢字・表記②
09		文章作成2	漢字・表記③
10		意見スピーチ1	総合問題
11		意見スピーチ2	文法①
12		意見スピーチ3	文法②
13		小論文作成	敬語①、②
14		総復習	敬語③、④
15		小論文講評・成績発表・補充指導	

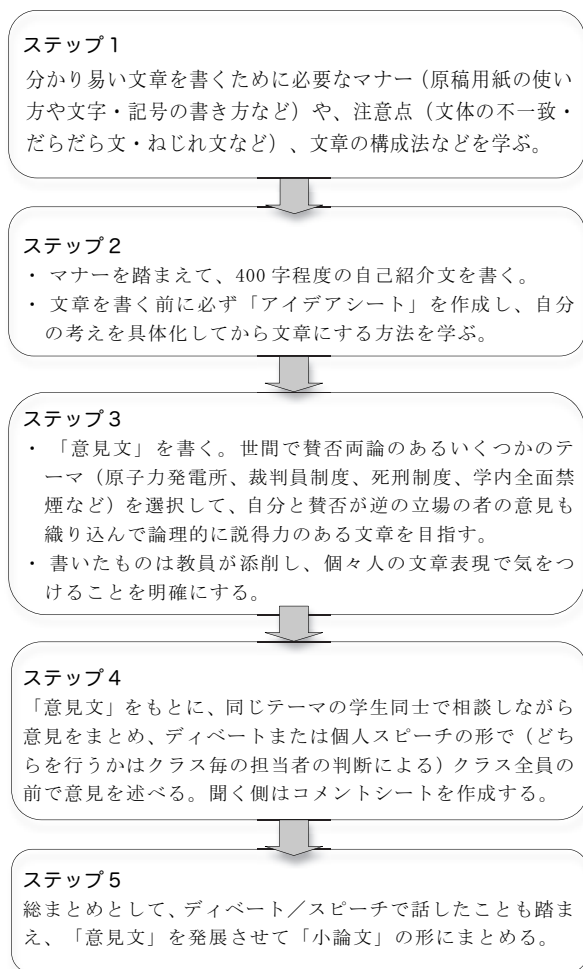


図1 「書くこと」「話すこと」の授業の進め方

2.6 成績評価

第2回から第6回までの内容の復習テスト20点、書くこと20点、話すこと20点、小テスト40点の配点で評価している。その他100点満点の別枠で、日本語検定の合格による加点（3級認定で10点、3級準認定で5点）がある。

出席不良者に対しては、第5回の授業が終わった時点で欠席・遅刻が目立つ学生を授業担当者から報告してもらい、学科ごとにまとめて各学科主任に連絡している。これは必修科目の学科に対してのみ行っており、出席状況の悪い学生の情報提供という意味合いが強いが、可能な範囲での指導をお願いしている。学科主任から学生の状況説明のフィードバックがあったり、即座に指導が入って翌週から該当学生の出席状況がよくなったりした例がかなりある。

単位不認定者は、春学期については1年目が受講者1,356名中30名（2.2%）、2年目が1,417名中48名（3.4%）であった。2年目はやや増加したが、それでも低率である。どのクラスもおしなべて出席状況はよく、学生の受講の様子もまずまずであるという報告を各教員から受けているが、それが低い不認定率の主な

要因であろう。なお、秋学期については1年目450名中33名（7.3%）と春学期に比べて高率だが、これは秋学期の開講クラスが3つの学科を除きすべて選択科目である学科を対象としていることの影響であると考えられる。

2.7 授業内容を共通化するための取り組み

「はじめに」で述べた通り、「日本語スキルA」は全クラスがほぼ同内容の授業である。そのためシラバス、教科書・小テスト用教材は同一のものとし、評価方法も統一した。小テストは、専任教員が各回ごとに数種類の問題を作りアトランダムに各クラスに配布した。ただし、復習テストは各学科・クラスの特性も考慮に入れて各教員で作成することとした。

以上のように授業内容の共通化を図っているが、このような形式的な統一だけでは共通した授業は保証できない。担当者全員の定期的な打ち合わせや、折に触れての情報交換（授業方法や学生対応など）によって調整を行うようにしている。

3 日本語検定の実施と結果

3.1 受検の状況

日本語検定は、中部大学を準会場として平成23年度より全学挙げて実施されることになった。1年目春学期の当日の受検者は400名（2級50名、3級350名）、2年目の今年春学期は595名（2級44名、3級551名）である。受検者は「日本語スキルA」の受講者が1年目で約3分の2、2年目で8割強を占める。

日本語検定は日本語のスキルアップの動機付けや学習効果の測定に意味を持つと考え「日本語スキルA」の各授業で受検を推奨していること、さらに中部大学後援会から受検料の一部が補助され学生の金銭的負担が軽減されていることもあって、多くの受検者を集めた。2年目になると日本語スキルの授業や日本語検定の認知度が高まってきたためか、受検者が大幅に増加した。400人～600人規模の検定試験を円滑に行うため、キャリアセンターを初め、各学科、各学部事務室など、まさに全学的な協力を得て日本語検定の実施が可能になっている²⁾。

3.2 合否の結果

表2は、過去3回の日本語検定の合否結果である。認定率は2011年春が40.6%、2011年秋が25.7%、2012年春が54.8%と波がある。全国の認定率と照合すると、受検者全体の認定率が上下するのに合わせて本学の受検者も認定率が上下していることがわかる。本学の認定率は試験の難易度に比例しているものの、2012年春と2011年春はいずれも全国認定率よりもやや上回って

いた。2011年秋に関しては全国認定率よりも下回ったが、春と秋では受検学科が異なるためか、あるいは他に原因があるのか、回を重ねていく上で確認するつもりである。

表3は、過去3回の平均得点率を示したものである。本学は「短大・大学・大学院」の平均得点率に非常に近い値であり、「日本語検定」に関して言えば、平均的な大学生の日本語力を有していると言えよう。

3.3 領域別の結果

次に、「日本語スキルA」を受講している学生と受講していない学生の間に差があるのかを見ていく。

表4は、領域別の平均得点率（2012春）を示したものである。3級の受検者は551名であったが、そのうち「日本語スキルA」受講者は448名であった。すべて1年生である。残りの103名は「日本語スキルA」を受講しておらず、本人の意志で、あるいは学科での勧めもあって受検した学生である。103名のうち13名

は1年生であるが、あとはすべて2～4年生である。

表4を見ると、総合得点率はスキルA受講者が71.9、非受講者が70.9と近い値を示している。そこで、両者の間に有意差があるかどうかを見るためにt検定を行ったところ、両者の間に有意差はみとめられなかった。次に、6つの領域別に見ると、「敬語」「文法」のみ両者の間に有意差がみとめられた。2.2で述べたように、「敬語」と「文法」は、「日本語スキルA」で重点を置いて扱う項目である。この2つの項目が非受講生よりも得点率が上回っていたことは、教育の成果が上がっていると言ってよいであろう。

他の領域「語彙」「言葉の意味」「表記」「漢字」については、有意差はみとめられなかった。すなわち、受講生と非受講生でも変わらないという結果であった。ただし、スキルA受講者は1年次の6月での受検であること、非受講生はほとんど2年生以上の学生であることを考えると、上級生と同じ得点率であったことは評価できる。

表2 中部大学における過去3回の日本語検定の合否結果（3級）

	受検者数	認定者数 (認定率)	準認定者数 (準認定率)	不合格者数 (不合格率)	全国の認定者数 (認定率)
2012年春	551	302	174	75	14,135
		54.8%	31.6%	13.6%	49.2%
2011年秋	230	59	74	97	13,847
		25.7%	32.2%	42.1%	29.2%
2011年春	350	142	110	98	15,062
		40.6%	31.4%	28.0%	34.4%

表3 過去3回の平均得点率（3級）

		中部大学	短大・大学・大学院	すべての 受検者
2012年春	得点率	71.7	71.8	68.7
	受検者数	551	5,508	14,135
2011年秋	得点率	63.3	62.6	59.6
	受検者数	230	5,025	13,847
2011年春	得点率	68.7	67.6	63.9
	受検者数	350	4,286	15,062

表4 2012年春 領域別の平均得点率（3級）

	総合	敬語	文法	語彙	言葉の 意味	表記	漢字
全国平均	68.7	71.9	76.9	65.7	66.4	66.6	68.5
スキルA受講者 (N=448) (SD)	71.9 (8.5)	76.8 (12.3)	80.3 (9.6)	68.7 (10.7)	70.1 (11.1)	68.7 (10.6)	70.2 (10.5)
スキルA非受講者 (N=103) (SD)	70.9 (9.1)	74.1 (12.2)	77.9 (9.4)	68.0 (10.7)	68.7 (12.1)	69.2 (11.1)	71.9 (10.3)
t 値	t=1.07 n. s.	t=2.06 p<.05	t=2.35 p<.05	t=0.64 n. s.	t=1.15 n. s.	t=-0.40 n. s.	t=-1.48 n. s.

2011～2012年の間に行われた3回の日本語検定の受検状況を踏まえると、今後の課題として以下のような点が挙げられる。

- ・「日本語検定」が学内で受けられるということが周知されつつあり、受検者は回を追うごとに増えている。「日本語検定」受検は資格を取得するというだけでなく、これを目標として大学生・社会人に必要な日本語の知識を身につける良い機会である。今後も「日本語検定」を具体的な目標として日本語力の向上に努めてもらうよう、教員側も学習の動機付けを行っていくことが必要であろう。
- ・試験の難易度に左右されない、しっかりとした基礎力を身につけることを目指す。
- ・「日本語スキルA」で特に取り上げている領域「敬語」「文法」に関しては、はっきりとした教育効果が見られた。他の領域、特に苦手意識を持つ学生が多い「表記」「漢字」について、限られた授業時間の中で小テスト以外の有効な手だてを織り込むことができないか検討する必要がある。

4 学生の声

授業目標の設定、シラバスの見直しなど、これまで学生のニーズとレベルに適した内容を目指してきた。では、実際に「日本語スキルA」を受講した学生はどのように感じているのか。学生の感想の中から、典型的なものを以下に挙げる。

- ・まさか大学で敬語や文法の勉強をするとは思っておらず、なぜするのかと思ったが、全然知らないことを学べてよかった。
- ・規則性に従えば、苦手だった敬語も「ら抜き言葉」も理解でき、間違った使い方が減った。
- ・今まで使っていた敬語は間違いだらけだったとわかった。社会に出てからきっと役立つと思う。
- ・スピーチは緊張したが、その前にグループでの意見交換や発表練習があったのでよかった。
- ・スピーチをすることよりも、スピーチを聞いて適確な質問をする方が難しいことに気づいた。
- ・初めて小論文で800字以上書けるようになって嬉しかった。

- ・文章を書く楽しさを知った。
- ・作文もスピーチも苦手だったので、講義を受けるのが嫌だった。しかし、作文の書き方やスピーチの工夫などがわかりやすく説明されたので、自信を持って書くことも意見を言うこともでき、苦手意識が克服できた。

5 まとめと今後の課題

以上のように、日本語スキルは立ち上げから1年半が経過し、授業運営や日本語検定の実施が軌道に乗ってきたと言える。

しかし、「日本語スキルA」の授業内容の点検と改善、ならびに出版したばかりのオリジナル教科書の改善、受検者数に応じた日本語検定の円滑な実施など、まだ基本的な問題で定期的に検討を加えなくてはならないことが多い。今後も受講者の様子をよく観察・分析して、よりよい態勢づくりを目指していきたい。

謝辞

日本語スキル兼担の先生方、非常勤講師の各先生方の積極的なご提案・ご協力により、「日本語スキルA」の立ち上げと日々の授業の運営が円滑に進み、このような実践報告が可能となりました。厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 日本語スキルWGは、日本語教育センター、現代教育学部、人文学部、アドミッション戦略室の専任教員で構成された。WGのメンバーは「中部大学日本語スキル研究会」として『日本語スキル』を執筆し、兼担として「日本語スキルA」の授業を担当している。
- 2) 受検者の多い学科に関しては、当日の試験監督者のご協力をいただいている。日本語検定の申し込み手続きはキャリアセンター、監督者の選出等運営に関わること・検定問題の再配布は各学部事務室にお願いしており、2年目からは現代教育学部共通教育科共通室に事務作業全般を引き受けていただいている。

〔	准教授	現代教育学部	共通教育科	寺井	一	〕
〔	准教授	現代教育学部	共通教育科	生田	裕子	〕